
名も無きもの

津田花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名も無きもの

【Nコード】
N1151C

【作者名】
津田花

【あらすじ】
悲しく孤独な、名も無き少年の物語。

(前書き)

このページまで来てくれてありがとうございます (^ ^)
時間があつたら読んでみて下さい m ((m (^ ^)
♪

かつて、大罪を犯した魔術師がいた。

魔術師は国を滅ぼし世界を焼き付くし、疲れはてた頃には周りには何も無かったという。

疲れた体を横にし癒していると、気づけばそこは牢獄だった。

魔術師はまだ少年だった…。

彼はまたもや疲れていた。

なぜなら牢獄を抜け出たから。

抜け出たのは自分の無実を確かめたかったから。

あのときの自分を動かした、他の誰かの存在を確かめたかったから。

漆黒の闇を歩み、気がつけば、足が向いた先はスラム街だった。

人気の無いような場所。

誰もが口を閉ざし空腹をしのご場所。

彼のいた国は、彼の手によって滅ぼされた。

やめろ！！やめてくれ！

さっきまで生きていた人がぐったりとして動かなくなる。

その姿は血にまみれ、取り返しがつかない惨い（むごい）形。

「違う…違う！！これは僕の腕なのに…。」

彼が目にした自分の腕は彼のものではない赤に染まっていた。
意志があるのに体が自分とは別の力につき動かされる。

「こんなの嫌だ！！」

叫べば叫ぶほど、溢れる魔力で周りの人は気を失っていく。

自分の世界が自分の手で滅ぼされる様を見ることは、まだ幼い少年には、耐えがたい苦しみだった。

そんな過去を思い出してしまうのは、このスラム街が過去を懐かしく感じさせるからだろうか。

「これをどうぞ。」

突然目の前に差し出されたのは、一欠片ひとかけらのパン。

どこかの没落貴族だろう。

服装は清楚とは言えないが、綺麗な生地だ。

長くおろした赤毛と似合っている。

「ありがとう。」

低い声がこぼれた。

そのとき初めて顔を見た。

いつの間にか顔を覗かせた太陽が、彼女の顔をひどく美しく照らした。

彼は、彼女が優越感に浸るためにそれを差し出していたことを察していた。

「貴方、脱獄者かしら？」

「それがなんだ？」

彼女がそう言うのも当然で、彼は犯罪者の証、番号札を耳に開いた穴からぶら下げていた。

「かくまってあげましょうか？」

彼女は歪んだ笑顔を見せた。

「断る。」

隠れているほど彼は暇ではなかった。

それに彼女には、他人をかくまえる家など持ち合わせて無いだろう。
彼は受け取った物をその場に置くと立ち上がった。

気がつけば彼の後ろにはやせ細った男の子がいた。

彼が置いた物を拾い、全力で駆けていった。

「あつ！それは私がこの人に……」

「何でもいいだろ。優越感には浸れただろう？」

彼女の美しい顔が羞恥の赤に染まった。

「ごめんなさい。」

「別に謝ることもない。些細なことだ。」

そう、それは彼が受けた仕打ちより遙かにどうでもいいこと。

顔を赤らめたまま、彼女の口が透き通った音を奏でた。

「あの、あなたの名前は？」

「名前……？」

考えてもみない質問だった。

顔も見ることのない親が付けた名など知らなかったからだ。

自らの手で滅ぼしたスラム街にいたころは、”ぼうす”で通っていた。

彼の知っている名前はただ一つ。

「……ルート。」

それは彼の愛した名。

あの街の名前。

彼は歩いていた。

彼女を引き連れて。

いや、正しくは彼女はついてきただけ。

「ねえ、私も連れていって！こんな町はもう嫌。」

彼は無視して歩く。

「お願い！！私は天涯孤独なの…。」

すぐるように見つめる瞳はもう透き通ってはいなかった。

「知るか。」

「なんて冷たいの？」

それは仕方の無いこと。

あの日以来、彼には温かい血は通っていない。

「ジュナス・リリック・マカード。」

突然彼が口から出した言葉は、さっき彼女が口にした名前。

「ジュナでいいわ。」

柔らかな表情の彼女は歌声のような声を奏でた。

「一つ聞きたい。俺が牢獄にいた間何があった？」

彼女は青空を見上げた。

「そうね、貴方はいつから牢獄に？」

得意げに声を奏でた。

「”滅びの日”から。」

彼女から笑顔が消えた。

「そう。」

もちろん彼は、それに動じることはなかった。

「答える。」

「唯一残ったこの国の王が世界を統一したわ。内乱はまだ至るところで続いているけど。」

「冗談だろ？」

彼の足が止まった。

「真実よ。」

彼女の顔には闇が映し出されていた。

「滅びの日…貴方が悲劇の被害者だったのね。」

彼女はまた何も無い青だけを見つめた。

「被害者？」

「私は、あの日の真実を知ってるの。」

彼女の瞳の緑が曇った。

「詳しく教える。」

彼は灰色の瞳でそれを見つめた。

「私はあのころは、まだ一流貴族だった。日々が美しかった。平和で平和で、この世の中が狂うことなど無いと、信じて疑わなかった。」

彼女は打って変わって、瞳を輝かせた。

「そんなことを聞いてるんじゃない！」滅びの日”の真実を教える
！！」

彼は彼女の襟元を掴んだ。

驚きの悲鳴の後、彼女が口を開いた。

「あれは王が有能な魔術師に命じてやらせたのよ。世界征服のために他の国をすべて滅ぼすように…。」

彼女の襟から手が離れた。

「やらないとその魔術師を殺すってね。でも世界を滅ぼすほどの力を持ち合わせてなかった彼は、より力のある他人を操ることにした。」

彼女の瞳が彼の瞳を捕らえた。

「それにはまだ幼くて力に目覚めていない貴方が適任だったの。」

彼は悲しみに満ちた彼女の瞳を見た。

「それで、その魔術師は？大衆の命より自分の命を選んだ奴は？」

「死んだわ。」

「死んだ？どういうことだ？」

「貴方の想像を絶する力に翻弄されてね。本当は貴方が死ぬ予定だったのよ？力を使いきってね。」

「おまえ、異様に詳しいな？」

「だって、お父様の資料を勝手に読みあさったからね。他国にいた私の友達の死の理由をどうしても突き止めたかったのよ。」

彼の疑いの目に彼女は妙に冷静だった。

それはまるで人形のように。

「なるほどな。」

彼は興味を示していないようす。

「貴方これからどうするの？」

彼はそうだな、と短めの黒髪をかきあげた。

前髪で隠れていた瞳を覆うまつげは、光によって美しくキラキラと輝いた。

彼の心とは裏腹に。

「俺を操った奴に復讐でもしようかと思ったが、死んだんじゃできないな。」

「じゃあ王様でも殺せば？あの人は父様を葬ったのよ？それに……。」

彼女は、よほどのショックなのか、ハハッと笑って見せた。

「そうだな。」

彼は悲しみの笑みを浮かべた。

その時彼は強大な魔力によって全てを察した。

「ここが王宮よ。」

彼は初めて見る立派な建築物に目が釘付けになった。

「早く王を殺して。」

彼女は、もう色を失った瞳で白い石畳を見つめた。

「嫌だね。」

彼はあんな事を口走ったが、本当はもう人を殺めたくなかった。自分の意志では無いにしろ、目の前で罪のない人間が生き絶えていく様は二度と目にしたくなかった。

たとえそれが苦痛を与え、時間を奪った相手であろうとも。

「なぜそれほどまでに王を憎む？殺す必要があるのか？」

「早く……」

彼女はうつむいたまま。

「他人の命を奪った者は耐えがたい苦しみを伴う。苦しませておけばいいものを……」

その途端、彼女は内側の怒りを露わにした。

「私が……私が王を殺さないと気が済まないのよ……！」
握りしめた拳からは赤が滴っていた。

「くだらないな。」

ため息をついた彼の心は悲しみに満ちていた。

「何？」

美しさを捨てた彼女の醜く鋭い瞳は彼を見た。

「おまえは殺したいんじゃないって殺して欲しいんだろ？」

何もいわず彼女は目を見開いた。

「俺は殺してはやらないがな。」

彼女はまた彼をにらんだ。

「殺せ……！」

「断る。」

「ならば死ね……！」

指先を鋭くとがらせ、まるで槍のように彼の顔めがけて突き進めた。

彼は風でも受けるかのように体をかわした。
腕が動く度、彼女の手のひらからこぼれた赤が、白の石畳を彩った。

「死ねえ！！！」

「レット・ヒルド・マカード。」

「何っ？」

途端に、彼女の動きがぴたりと止んだ。

「おまえの本当の名だろ？」

そう、彼女はジュナス・リリック・マカードではない。

「なぜ分かった？」

「知るか。」

それは紛れもなく彼の魔力のせいだった。

彼自信、その存在には気づいていなかったが…。

「貴様…殺す！！！」

彼女、いや、レットの顔は歪んだ笑顔に満ちていた。

「言っておくが、俺はおまえを殺さない。たとえ俺を操った者だとしても。それに…俺はお前の苦しみを止めてやりたい。」

無我夢中で彼に腕の槍を突き刺そうとするレットを彼は涼しい顔でかわしていく。

「なぜだ！？私を殺せ！！そして死ね！！！」

歪んだ笑顔は消え、この世の者とは思えないほどの恐怖を浮かべていた。

「生きているのがそれほど苦痛か？」

「当たり前だ！！私は数え切れない人間を殺した！！なぜだか分かるか？」

レットの声は枯れ、女性の物ではなくなっていた。
もちろんレットは女性ではない。

自らのすべての力を使って、あたかも少女のように見せていただけ

だった。

その少女の姿は正しく（まさしく）、レットが失ったの愛する娘だった。

「知らないね。」

「娘を…ジュナを殺されたんだ。卑劣にも目の前で…。だから殺した！！仇を…他人を身内を！だが恨みは晴れなかった！お前のような力が欲しかった！そうすればジュナはっ…」

「そうか、それは残念だな。俺はこんな力は欲しくはなかった。」
レットの刺すような動きが止まった。

彼はその力で現した、掴むことすらままならない幻影のナイフを、レットの首もとに当てていた。

「ああ、やつと私は…」

レットは力つきた。

体はぼろぼろに崩れ、砂のように消え去っていった。

その存在はただの未練だった。

レット・ヒルド・マカードは、もうすでにこの世を去っていたのだ。

残された彼は知っていた。

あの日の悲しみも、命の尊さも。

彼がかつて美しい花を愛で、人を愛おしく思っていたことも。

彼はいつかきつと、自分の”本当の名”を呼んでくれる人を探し出すだろう。

そしてきつと平和な世界を…

（後書き）

ありがとうございました。

さらに暇があれば下もご覧下さい（＾―＾）v

これは、すごくテンションが低いときに出来ました。ホントに「うわぁ…」って感じなんで、引いたらすいませんb（・Δ・*）はじめは彼は死ぬ予定だったんですけど、後半作ってる時期にテンション回復期に入ったんで彼は死なずにすみました（´、`）
本当に気分屋ですε〃（´、`*）
まだお時間があれば感想を何でもいいんで、書いてくれたらうれしいです（*＾―＾*）

では、また機会があればお会いしましょう（＾o＾）ノ”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1151c/>

名も無きもの

2010年10月8日15時29分発行